法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

比較研サロン 講演記録 子年のしめくくり : 鼠・猫・商売繁盛 : 「十二支ねずみの桃太郎」より鼠よけ猫まで : 近世近代日本・動物分化史のもう一つの側面[含 質問]

ヘリング, アン / HERRING, Ann

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
経済志林 / 経済志林
(巻 / Volume)
76
(号 / Number)
3
(開始ページ / Start Page)
4
(終了ページ / End Page)
32
(発行年 / Year)
2009-03-09
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003900

【講演録】

比較研サロン　講演記録

子年のしめくくり―鼠・猫・商売繁盛―
「十二支ねずみの桃太郎」より鼠よけ猫まで
近世近代日本・動物文化史のもう一つの側面

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

報告者：経済学部アン・ヘリング教授
日　時：2008年12月５日（金）　18：30〜21：00
場　所：多摩キャンパス比較経済研究所会議室

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

（注）「比較研サロン」は、経済学部学会が比較経済研究所と共催で定期的に開催している研究会です。
12月の研究会は、本年度末で定年退職されるアン・ヘリング教授を迎えて開催されました。ここに当日の記録を編集して掲載します。

絵　所　今日は，比較研サロンにヘリング先生を報告者としてお招きしました。先生は残念なことに今年度で御退職なされるので，今回は貴重な機会です。

ヘリング　残念とおっしゃってくださって，どうもありがとう。（笑）

絵　所　今日の報告には，「子年のしめくくり―鼠・猫・商売繁盛―，『十二支ねずみの桃太郎』より鼠よけ猫まで』といういささか長いお題がついていますが，一言で言えば「近世・近代日本動物文化史のもう一つの側面」というテーマでのお話になると思います。

ヘリング先生もご承知のとおり，南方熊楠の有名な『十二支考』というのがありますでしょう。最初に虎か何かを書いたら，すごく当たったんですよ。それ以来毎年お正月が近くなると，「これ，書いてください」と頼まれて，書きつづけ，結局，十二支をみんな書いてしまったということでした。今はちょうど師走ですから，ヘリング先生，すばらしい題だと思って期待しています。

また先生は貴重な書籍をたくさんもたれています。今日はそれを見せてくださるということです。

ヘリング　時間の許す限り。

絵　所　目の保養になるかなと思っています。

ヘリング　頭の刺激に，少しぐらいなればうれしいですけど。

絵　所　それではよろしくお願いいたします。

ヘリング　はい。皆様のお手元にプリントがありますか。最初に猫とネズミの関係についてお話しして，途中から絵に話題を移していきたいと思います。

猫やネズミを論じる時，純然たる美術や，宗教，文学の対象としてのみ扱うのではなく，経済と社会というレンズを通して見つめることができれば，人間との関係が浮き彫りにされて見えてきて面白い。せっかく，経済学部の仲間に入れていただいたのですから，人類にとっての猫，そしてとくに日本にとっての猫とは何者かを本日少しお話しできればと思いました。

猫は新参者の家畜

お話したいことは，大きく分けて，だいたい三つあります。最初は猫のことです。猫というのは，そのへんで香箱を作って，のどをゴロゴロ鳴らしている可愛いものですが，人によっては，化けるから怖いとも言うでしょう。現在の猫は，経済生活との直接の縁をそれほどもってはいません。三味線屋は別として。

実は，猫は，家畜の中でも登場時期としては最も新しいほうの一つです。古代エジプトから始まって，せいぜい5000年くらいか，もしかしたらもう少し新しい。ですから，犬，牛，馬などに比べると猫は家畜としてははるかに新しく，全く新入社員みたいなものです。猫が人間と縁ができるようになったのはいつごろなのか。『猫の民俗学』の著者，大棹先生のように，それを詳しく研究している方もいますから，ぜひ，いずれその方々の研究書を見ていただきたいと思います。

そのへんの砂漠の野性の猫を最初に家畜にしたのは，ほぼ確実にエジプトです。ちょうど日本でいえば，お稲荷さんのキツネといった具合でしょうか。穀物中心の社会では，ネズミがいちばんの困り者です。野生の猫，山猫は，西表とか，対馬にわずかばかり残っていますが，はたして日本の本土にいたのかどうか，それはわかりません。日本本土ではキツネが現れてネズミを食ってくれるということで，たぶん，米作りが始まったころ，キツネが恩人と思われて，それで稲荷明神の使いと見られました。

エジプトの場合も似ています。キツネと違って猫は非常に性質が温厚で，お行儀がよくて，あちこちに変なものを落としたりしません。お手洗いがあれば，ちゃんとそこでするので，猫は案外早くに，家庭，宮廷，お寺，そして皇帝のところに落ち着きました。そして猫は，穀物中心の国にとって，ネズミを捕ってくれる大恩人でもあり，長い間，猫を神様に準じるものにしただけでなく，殺してはいけないものとし，国外不出にしました。まさかと思うでしょうが，そのまさかです。

でも，考えてみてください。これから話に出てくるお蚕さんも国外不出だったのですが，実際は持ち出されました。中国では，お嫁に行くお姫様が，髪飾りに頂いたバラならぬ，お蚕さんと桑の実を隠して，嫁入り先にもって行ったわけです。また，イランの場合は，東ローマ教会，つまりギリシャ教会の牧師さんの杖に隠してビザンチン帝国に持ち出され，そしてそれがまた同じような手口でベネチアに運ばれ，そこは絹で商売繁盛となったわけです。

猫がエジプトからどのように持ち出されたかはわかりませんが，猫がどういうかたちで日本に入ったか，それは調べればほぼ確実にわかるのです。飛鳥時代，奈良時代に，お経，仏教とともに司書の助手役として入ったのです。

近年まで，韓国ではお寺に住み着いている猫の一家がいて，夜になると，書庫に入って，そこでネズミの番をしたのだそうです。たぶん，そのようなネズミ番は相当昔からあったことで，それゆえ引き続いて日本にも運ばれたのです。中国から直接来たという説もあります。両方あったでしょうけれども，とにかくネズミは書籍が大好きなので，人間はネズミを捕るという猫の非常に得意なところをネズミ退治に利用したのだという理由ははっきりしています。

では仏教とネズミの関係はどうだったのでしょう。猫の姿が涅槃絵にないということ，絵画にないことは有名です。おそらく，お釈迦様があの世へ行ったときの様子を描いた絵が作られたとき，猫はインド，ましてや中国にいなかったのでしょう。エジプトでは国外不出だったわけでしょう。だからアンカラ猫，トルコ猫，ペルシャ猫，さまざまありますけれども，やっとのこと，少しずつ，とくにアレキサンダーの時代に以前のようなエジプトの政治体制，経済体制が崩れて以降に，猫は海外に出るようになったのです。

ローマ時代の詩歌には，かわいいもの，困ったものとして，ネズミを詠んだものがあります。ネズミが描かれた絵もあります。ただ，猫は非常に

少ないのです。かろうじてローマの自由の象徴たる女神の足元に猫がちょこんと座っているのがあったらしいです。どうやら，猫は自由というものの象徴と見られていたみたいですね。でも非常に少ないのです。そして絵画やモザイク絵など，残存している物質文明を見る限り，ポンペイに有名な猫がハトを押さえる絵があるほかは，猫が登場するのは非常に遅いです。

ですから，たぶん，涅槃絵の形が決まった時に，インドや東南アジアに猫はいなかったのではと考えられます。だから，牛も馬も人間さまもみんな，おんおん，わんわん，泣いているのに，猫は一緒に泣いていないのです。

では，なぜ，いなかったのでしょう？後に猫の不在を理由づける伝説や言い伝えが創作されます。例えば，猫は泣かずに笑ったという話があります。これは，お釈迦さんがあの世にいく意味がわかったのは猫ぐらいで，だから笑った，めでたし，めでたしという意味に解釈できると，私は面白半分に考えています。猫はたぶん嫌われていたわけではなかったでしょう。

その他にも，笑っている状態でいるとかいないとか，猫はいろいろなかたちで伝説，言い伝え，絵画に利用されています。とても面白いのがひとつあるのですが，自宅の680個の段ボール箱のどれかに入っていて，今日，ご覧に入れられないのが残念です。

かの有名な八代目団十郎が自殺したとき，結局，有名な２枚もしくは３枚続きの錦絵が作られます。団十郎はお釈迦様のような格好をして寝ていて，女性という女性，女たるものからメスたるものまで，みんな，わっと泣いている。尼さんも女郎さんも，年寄りも若い人も，田舎娘も徳川奥女中，公卿の女性も女中も，みんな泣いている。そして牛，馬等々，それにきれいな赤い縮緬の首飾りをしたメス猫が両手を挙げて，うー，ニャンと泣いているのが非常に印象的です。涅槃図での猫の不在に纏わる伝説，言い伝えは，非常に利用価値があるわけです。

猫は，ネズミがこないようにお経を守るという役割で日本に入って来て，あっという間に広まります。皆さんご存じのように，今年は『源氏物語』

千年紀で大騒ぎですが,『源氏物語』の「若菜上」と「若菜下」にも猫は登場します。かの有名な別離のお涙頂戴の件で，女三宮と柏木は変なまねをするのですが，その仲人役をやったのは猫だったということです。

そして猫は後に，近世の柳亭種彦『偐紫田舎源氏』にも登場します。場合によって，猫が恋文をくわえて彼氏のところへ走って行くという姿もあります。猫が『源氏物語』などに登場するに至るには，日常生活の中でも身近に猫がいるという実体があったはずです。清少納言『枕草子』にも，また『更級日記』とあと何点かの平安の古典文学にも，宮廷のペットとしての猫が登場します。当時の猫の中には，命婦という非常に高い位まで授かったものもいたのです。

大黒信仰に伴うネズミの尊重

ところが，そこでなんということか，ネズミを捕る猫を殺生してはいけないということで，それを避けるため，猫に紐をつけて飼うべしという放し飼い禁止令ができました。ネズミにとってはうれしいことだったでしょう。今日は鎌倉・室町初期は省きますが，古い絵巻などを見ると，農家の

サロンの様子

縁側で猫が香箱をつくっている絵をけっこう見かけます。やはり農民にとって猫はありがたい存在だったとわかります。

やがて徳川時代になると，猫は年貢，お金，富，財産，商業，産業と関わりをもつようになります。そこで慶長年間に,「猫の紐を解くべし」として，放し飼い禁止令が解かれました。猫は，商人にとっても，徳川さんにとっても，年貢米を扱う蔵前のお役人にとっても，大坂，船場などの商人たちにとっても，ありがたい存在だったのです。だから，そのときから猫は都会人となって，ネズミから大事な品物やお米を守る役割を久しぶりに与えられたのです。

しかし，そこで妙な現象が起こります。富を司る神様である恵比寿さんや大黒さんとネズミの関係です。これをさっと話して，その後，絵に入りたいと思います。「ご～ざった，ご～ざった，誰様がご～ざった，大黒様がござった」といように，大黒様信仰が盛んになると，大黒様の使いとしてネズミが登場するようになります。エジプトのバステトという女神にとっての猫，稲荷明神にとってのキツネと同じように，今度は大黒様にはネズミとなったのです。

ヘリング教授

その理由はいろいろ考えられます。定かではないです。ネズミについて南方熊楠先生が何を書いているかをいつか見てみたいですが，常識的に言えば，既に『日本書紀』や『古事記』の大国主命や大黒の逸話の中に，ネズミにちなんでいる話が一つあります。

ネズミは十二支のうちにも

入っていますが, 実は十二支は各国共通ではありません。「猫年」がないのが残念と言う人もいますが，東南アジア，インドネシアの一部では，卯年に変わって「猫年」があります。ネズミは「ネズミ算的に」といわれるほど，よく繁殖しますから，それはめでたい，子孫繁栄ということで，大黒様のところにネズミが入って不思議ではありません。また, 蔵にいっぱい, 「俵がご〜ろごろ」だったかな, ネズミに多少かじられても平気という長者こそ本物の長者というふうにみてもいいのではないでしょうか。それで, 概して徳川の中期はネズミの株が高いのです。

では，このへんで絵に入りましょう。本当は海外のネズミ・猫文学等, あるいは風習についてもお話ししたかったけれども，何しろ時間がありませんからね。

ギリシャの詩集には猫があまり登場しない。ネズミはかなり登場しますけれども, 猫はほんのちょっと出たり。『イソップ物語』といわれる寓話集にも，少々ですが出てきます。この寓話集は思われているほど大昔のものではないようです。さっき言ったようにローマの絵画や文学作品でも指折りできる程度の数だけしかないのです。でも，ローマ教会のこよみには, 猫やネズミ，犬などの聖がちゃんとあるようです。ただ，そればかりではなく，悪魔との関連があるともみられています。この話は今日は省きますが。

中世の英国の古い教会に，お坊さんがちょっと疲れたり，年配の方がちょっと立たなければいけないときに，なんていうか忘れましたが，腰掛けながら立ったふりができる腰掛けのようなものがあるのです。そこに，中世の彫刻家達がさんざん遊んで彫り物をしたのですが，その中に猫がいるのです。悪魔の象徴でもあるネズミに対して，目を光らせて，教会の番, 善の見方として猫が活躍するという説もあります。おもしろいです。日本に化け猫と善玉の猫がいるのと同じように，欧州でも，その両側面があるのです。

ネズミ文学はどこまでさかのぼるかというと「伝ホメロス」です。「伝ホ

メロス」であって「ホメロス」ではありません。「伝ホメロス」に「蛙と鼠の合戦」というものがあります。それはたぶん紀元前3世紀に書かれた，ふざけけっこばかりのものですが，「蛙と鼠」で思い出すのはなんでしょう。『鳥獣戯画』です。後に蛙が風刺画となって，有楽斎長秀という文化•文政頃の関西のおかしな画家，引き続いて河鍋暁斎，それに私が今ちょっといじっている小林清親などの絵では，蛙オンパレードです。でも蛙の話は今日はやめておきましょう。

ただ，ひとつ興味深い点，それは，人間は違う文化圏でも結局同じ目で身近な動物を見ているのだなということではないでしょうか。カトリック教会では，法律家の守り聖の絵の中で猫が傍らに座っていたりするのです。要するに猫が弁護士や裁判官として悪魔の象徴であるネズミを地獄で取り締まるというわけです。教会もふざけたところがたくさんあって，楽しいじゃないですか。

既に述べたように，猫はインド，中国，そして朝鮮半島を経て日本に入ってきました。まずは図書館の司書の手伝い。それから平安貴族のペットとなり，そしてネズミがかわいそうだから殺してはだめですと言われ，しばらくのんびり休んだ後，徳川初期になって，やはり猫の手を，本気になってもう一度借りることにしたのです。船場，蔵前，ばかりじゃないのです。ご存じのように，ペットとしての性質も依然続いていました。今，巷で騒がれている篤姫だって，猫を飼っていたことで有名です。その姿を描いた歌川芳年の錦絵もあります。家にあるのですが，箱から出てこないので今日はごめんなさい。

さて，大黒信仰でネズミと猫の立場はどうなったか。結局，両立しました。文学作品，芸術作品では，ネズミがしばらくの間，善玉で，猫が悪玉。善から悪へ移り変わりのプロセスや時代のことはまだはっきりとはわかりません。実際には猫の手を借りながら，でもちょっとネズミを拝んで…というのは，おもしろい現象です。天神様もそもそもはそういうものだったのではないかと思いますし，ある意味では教科書に偉人として掲載された

田中正造も同じようなものですが，憎き存在を神様に祀り上げて封じ込めるという意味での，両立なのです。一旦神様になってしまえば，その後，邪魔はしないでしょうし，外にも出てこないでくれるだろうから，あっぱれ，見事に一石二鳥というつもりでしょうか。日本の歴史をみると，そういうのはいくらでもあります。将門だってそうではないでしょうか。神田明神の神様は，元をたどれば平将門という説があります。憎き存在だからこそ，一旦神様に祀り上げてしまえば，あとは怖くないわけです。

歴史的図像のなかの猫・ネズミ

では，実際に，蔵前の働き者の猫，そして宮廷であいかわらずゴロゴロのどを鳴らすペットの猫，伝説の中のネズミ，これらを絵の中に見てみましょう。それらがどういう形でどのように続いたか，また，どんな楽しい「ふざけっこ」の解釈があったか，に注目しましょう。

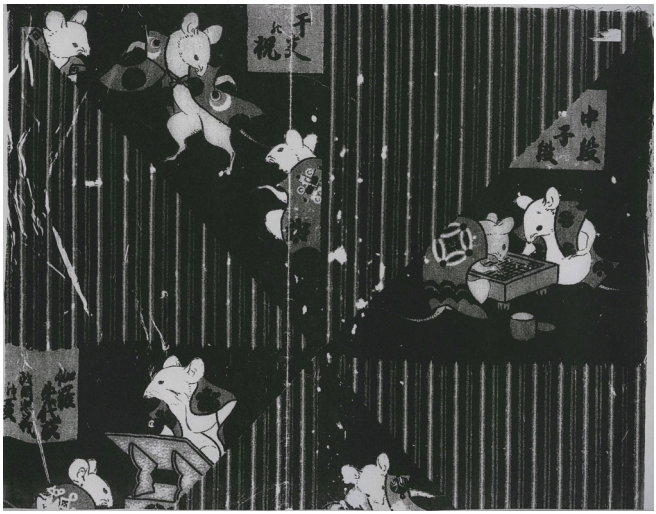
手元にある画像02は呉服の模様です。これはたぶん，小さい坊ちゃんの，中の上の晴れ着でしょうか。これはすごくしゃれた模様です。上のほうの図はネズミの囲碁です。「中段」「子段」というのがあって。だから，チュウチュウのチュウで中に。子年の子。そしてその隣りは干支のお祝いということで，宝オンパレードのネズミ半纏。そして下は，これはいいですね，お相撲。後で申しますが，大槌寳山というネズミの力士です。

そして次の写真です（画像13）。これは傑作。後で話に出てきますが，浄瑠璃『伽羅先代萩』の床下の段のお稽古の図です。『伽羅先代萩』という古典芝居では，切られ役，悪役は魔術師でネズミの使いでした。善玉のネズミももちろんありますけれども。私が日本に留学して間もないとき，尾上松緑さんが歌舞伎座で仁木弾正を演じているのを見ました。『伽羅先代萩』は，仙台藩に実際にあった騒動をもとにしたものですが，乳母（めのと）・政岡が若殿を毒殺から守ろうとして，我が子まで犠牲にするという話です。そこには，床下で鉄扇を片手に大きなネズミを足で押さえる，忠実そのものといえる荒獅子男之助という武者が登場します。ネズミはバタバタして

画像01

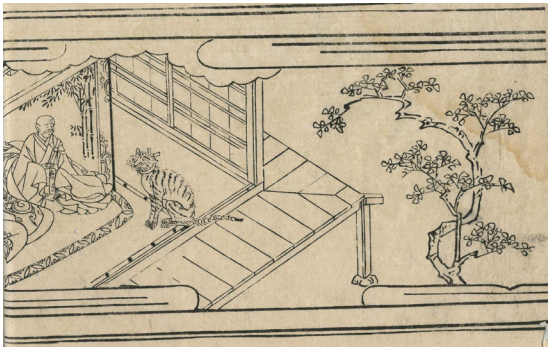
『新案競技鼠狩』『自習と受験』第 4 巻 1 号雑誌付録
画・加藤星児　出版・東京；大阪：寶文館　出版：1927年ごろ

画像02



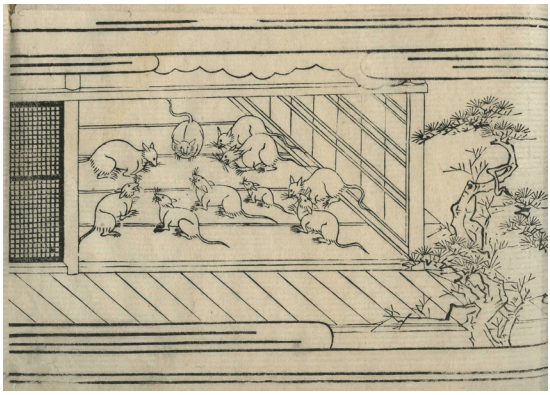
ねずみ模様の着物柄の一部　大正末期か昭和初期ごろ　素材：布地（モスリン）

画像03



猫の直訴場面

画像04



ネズミの相談場面

左・右ともに『猫のそうし』より　出版：大坂・渋川　出版年：享保のころ

画像05

上：上方絵本『鼠の行列』（別名『大黒舞』）
　　大坂　18世紀
下：上方絵本『鼠の四季遊び』
　　大坂（京都か？）　18世紀

画像06

猫の藤八拳：為永春水（二世）著
歌川国芳画『仮名読八犬傳』 第12篇・下巻・表紙みかえし　江戸・文渓堂版　嘉永４年

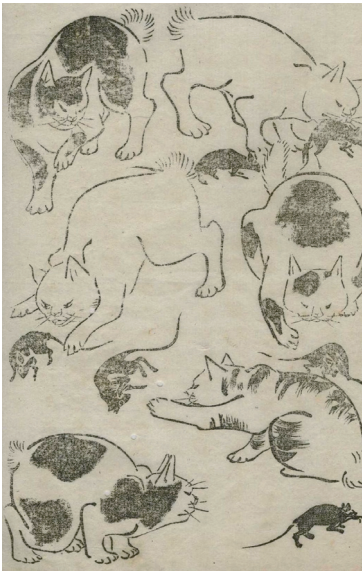
画像07

上方浄瑠璃本調の絵入り小説『こもち鼠花の山姥』下巻
暁鐘成編画　浦邊良斎書　版元・大坂　河内屋平七版　文政10年

画像08

掛軸（肉筆）
八幡山系の猫絵。明治初期

画像09



鼠とりの名人たち『魯文珍報』第９巻第５号
画・歌川廣重（三世）版元・東京：仮名読売新聞・開珍社　明治11年

画像10

周延「鼠よけ」絵・楊州　周延
版元・東京：綱島亀吉　明治19年

画像11

「志ん板猫と鼠のかたきどうし」〔忠臣蔵〕
絵・歌川よし藤　版元・東京：大橋　明治初期

画像12

ねずみ地獄『新板猫の戯画』
画・一鵬斉よし藤
版元・東京：松野定七　明治16年

画像13

明治の猫ねずみ：喧嘩と和解『志ん板ねづみのたわむれ』 画•歌川国利　明治中期

画像14

猫の糸とり・きぬづくり『志ん板蚕やしないぐさ』画•梅堂国政（竹内栄久）
版元・不明　明治10年代

画像15

ねずみよけ：大正の実用版画
『蚕大当たり・ねづみよけ猫』
版元・東京：綱島版　大正10年

画像16

『国華養蚕之栞』画・楊州周延
版元・東京：松成保太郎　明治32年

画像17

ねずみのあいさつ『どんたく絵本・２』編／画・竹久夢二
版元・東京：金子書店　大正12年

逃げてしまうのです。

私が見た舞台では，すっぽんから煙が出て，尾上松緑がこういう格好で，ネズミ一色の長袴を身に着けてあっという間にせりから上がってくるのです。そして，ちょうどその男之助殿が鉄扇を投げて当たったところに傷があるのです。この図は，まさに今お話した浄瑠璃『伽羅先代萩』床下の段のものです。

さて，これから順番に，猫，ネズミの図を見ていきましょう。私が見るところ，大黒信仰でのネズミと，その商売繁盛のお手伝いをする猫との関係は，ある意味でちっとも矛盾ではないのです。ネズミは夢，猫は現実です。実際，お殿様の中には，ハツカネズミを飼ったりする人もいたらしいです。もっとも，それ以外のネズミは，ちょっと「あっちへ行け」，大黒さんのところに戻ってと言いたくなりますよね。

絵本と「ネズミの行列」

例えば画像05を見てください。これは享保から宝暦にかけて大坂で発行された少年少女むけの絵本です。世界的にみても，今日の意味での絵本は日本が先駆者なのです。結局，裕福な商人達は子女に，一刻も早く読み書きそろばんを教えないといけなかったので，絵本ができたのです。稲荷明神のお米の恩人であるキツネが擬人化されているお祝い用の絵本もありました。

キツネでなければ，大黒様のネズミが登場します。私の恩師の一人，瀬田貞二先生のその恩師，小池先生は，日本の出版，普通の図書出版の対象となる絵本はキツネとネズミから始まったものだと言っています。そしてそれはお祝い用に最適で，実に売れたのです。

悪いけれども，大体において，文学，美術を論じる人は商売を忘れてしまうのです。自分の印税がどれくらい入るか関心があるくせに。でも，そういうふうにちょっと違う立場から見つめると，出版というのはすごくおもしろいです。どうして本が売れるか，売れないか。誰が得をするか，損

するか，もうかるか。

この画像は立派な大名行列のようなネズミの行列です。大黒舞というもう一つの題名があるのですけれども。このネズミの持ち物を見てください。これは毛槍などはないのです。そのかわりに算盤，大福帳，筆，要するに商売道具のオンパレードです。今より260年ぐらい前の京都，大阪の抜け目のない商人たちが，自分の子どもの将来を考えて，お祝いのとき，こういうものをあげたりしたのです。そしてそれが売れて売れて，版元は文字通りの商売繁盛になってしまったのです。

この表紙をちょっとみましょう。これはすごくきれいです。題簽つきで残っているのは奇蹟です。一度，取られているけれども，古い時代のもので題簽がついているのはめったにないし，この模様，模様紙。この間，私は千代紙についての本を書きましたが，余談ですが，これは絶対，千代紙のご先祖様のひとつだと思います。

『猫のそうし』とその系統

では，また本論に戻ります。その昔，中世のひとつの家庭読み物，文字通り文庫本の始まりだったと思われる「御伽草子」が登場しました。今日では,「室町小説」という言葉が好んで使われますが。その室町小説には猫とネズミ関係のものがいくつかありました。18世紀初期，大坂の抜け目のない版元の渋川が,「ああ，これは商売になる」と思って何冊か集めて，それを23編からなるシリーズにしたのです。文字通りの文庫。箱までついていて，岡山の池田文庫に箱付の揃いがひとつ残っています。その23編の中には『一寸法師』『鉢かつぎ』と並んで『猫のそうし』も入っています。バラになっているものはいろいろあります。揃いはなかなかありません。私のところに,『猫のそうし』があることは奇跡です。幸田露伴先生は，神保町あたりへ行くと,「『猫のそうし』はないか」と聞くので，評判となっていました。最後まで買ったかどうかわかりません。そのような貴重な代物が，なぜか，私の家にあります。ありがたい，かたじけない。

『猫のそうし』は中国の明時代の戯作に基づいていると思います。ネズミと猫の争いというか，中国の元の話ではネズミが猫に殺されて，閻魔大王に訴えるのです，「猫のやつが私を殺したのだから」。そして閻魔大王（日本の場合はお坊さんになっていますが）は，「そうですか，ではその猫を連れてこい」というのです。しかし，猫は「ネズミがこの私を訴えるのですか，とんでもないです。あのネズミめがどんな悪いことをしているか，考えてごらん。お経までかじっている」と反論します。そして，さらにネズミが訴えて…とあまりおもしろくない文章で長々続きますが，画像03，04を見てください。その次に現れ反論を立てるのがこの猫です。この猫の姿を見てください。先に話に出た，日本の国宝級の絵巻，つまり『鳥獣戯画』の猫を思い出しませんか。『鳥獣戯画』には，立派なトラ猫が描かれています。片手に扇，もう一方の手には自分の長い尻尾をこのようにもって，黒い冠をかぶり，まさにしかるべき紳士猫の姿です。今でもトラ猫はさいわい日本にいるのですが，トラ猫が日本に入ったとき，あまり人気がありませんでした。でもうれしいことに残っているし，それはどうやら猫の一つの原形だったようです。

でも，物語とは別に，この絵姿は猫の姿かたちが300年近く前はどうだったかを知るのにいい材料です。今日の話から省いた中世期の生活を描く絵巻物でも，猫は『鳥獣戯画』と大体同じです。

さて，猫とネズミの争いの話題に戻りましょう。お手元のプリントをご覧ください。これはどうも元禄前後，その『猫のそうし』からの歌です。「ねづみとる　猫の後ろに犬がいる　ねらうものこそねらわれにけり」。それが渋川版の，少なくともその本に入っています。それ以前からあるかもしれませんが，要するに中国の場合は閻魔大王，日本の場合は，この偉いお坊様がネズミにそのようになぐさめるのです。「おまえたちが悪いのです。それはのがれられないけど，でも，大丈夫だよ。いずれ犬がかたきをうってくれるから」と。（笑）だからそこでちょっとした三すくみができそうです。これはネズミと猫の争いのひとつの重要なパターンですが，ネズ

ミの会議が開かれる。まるで「イソップ」に出てくる，猫の首に誰が鈴をつけるかというわりあいに古い話，つまりネズミの会議です。おもしろいでしょう。

『塵却記』と「ネズミ算」

『塵劫記』というジャンルもありました。ほら，経済学部の皆さんが得意な数学，計算の領域です。その近世の子女にそろばんを教える教科書がおもしろくて。それに「ネズミ算」が入っています。ひとつがいのネズミ夫婦は１年にどのくらいの子孫が出るかという，その計算なのです。もうすさまじい数です。

当時の木版手刷りの数学の教科書に，出るわ，出るわ，ネズミが。いろいろなかたちで。ネズミばかりが１ページにうじゃうじゃ出たりして。あるいはお正月の，おいしそうな餅にねらいをつけたネズミ，それに気づいて追い払おうとする家族の人というような，にぎやかな絵など。ネズミ夫婦がそれぞれ裃と打ち掛けをかけて，お辞儀をしたり，そういう場面は画家の遊び放題でした。

そしてこのようなものがおもしろいほどよく売れたおかげで，大都会だけでなくある程度田舎の子女たちまでも数学がおもしろくなって，どおりで現在も日本は国際的な数学の試験でわりといい成績をあげているわけです。教材をおもしろくして子どもたちが喜んで勉強するという手があったことを，もう少し法政大学も学んだほうがいいのではないでしょうか。（笑）

ところで，ネズミの会議といい，あるいはインド系の寓話，ネズミの嫁入りといい，実は二通りあるのです。今の小学校の教科書や絵本などいろいろなところに出ているネズミの嫁入りの話では，結局，ネズミが天下一強いものです。しかし，近世ではそうでもありませんでした。ネズミの嫁入りの話がいつ大陸より日本に入ったのか，わかりません。民俗学者の今は亡き野村純一先生とちょっと意見が衝突したことがありました。徳川時代に，そのような本ははたしてあったでしょうか。野村先生の説が聞けな

くなって，残念…。

圧倒的に多いのは，ただ，人間の結婚の当時の段取りを表現した話です。つまりお見合いの話があって，結納を交換して，荷物をもって行って，花嫁方が大忙しで，花婿方が一生懸命に掃除をしたり，お料理をしたり，そして三々九度の盃。さらには，お里帰りして，仲睦まじく暮らして，いずれ子どもが産まれて，一家繁盛，じいさん，ばあさんとなったネズミが宝をもって子孫に囲まれ，めでたし，めでたし，という結末。いつから，インド系の寓話，つまりビルパイ系の寓話が入ったかはわからないのですが，今日はその話はここまでとします。

幕末にむけて：猫・ネズミ

さて，次に近世のものを見てみましょう。ちょっと絵がおかしいけれども，画像05は大黒舞の大黒様が実際に登場するところです。俵に乗って，大勢のお使いネズミに囲まれて。要するに18世紀の前半にごろごろしていたネズミの絵の典型的なもののひとつです。

とりあえずネズミは伝説や文学，絵などでは，善玉だったようです。そしてネズミの金太郎が現れて。ネズミの金太郎。（笑）ネズミの桃太郎とその伝説的背景を話したら際限がなくなってしまいますが，「十二支ねずみの桃太郎」とは十二支のことで，大黒様の縁起，ネズミの嫁入りや酒呑童子，もちろん桃太郎などなど，全部，ごっちゃ混ぜにしたふざけたものです。黄表紙の沿線で発展したのが，こういうおふざけや楽しみを入れて作られた浄瑠璃本です。

これは（画像07）大坂で発行されました。左から二人目がネズミの金時で，これは「キントト」「キントク」と読むのか，ちょっと自信がありません。お母さんはもちろん八重桐ならぬやねずみとなっています。お殿様は頼光を捩ってよるみつ，つまりネズミが出る時刻の用語を借りている。そしてお姫様はおのながひめ，ネズミの美人に合っている名前でしょう。そして忠実な侍女ははつか。要するにネズミにちなんでのふざけばかりの名

前となっているのです。ここにいらっしゃる皆さんは笑わないけれども，当時の浄瑠璃好きのおじさんはワッハッハと笑ったでしょう。猫を押さえているのが，ネズミのキントト改めて金太郎。だから全部ネズミです。そしてこれがめでたしの場面。金の字にチュウ。ネズミだからチュウでしょう。「俵のネズミが米食ってチュウ」のチュウ。だからふざけばかりのダジャレです。この時代にはこの手のダジャレが多いです。お話としては，大黒様のおかげで，善玉のネズミは難を逃れて逃げていくわけです。そして俵，ごろごろ。

でも，妙なことが起こります。年貢米だけで足りなくなって，養蚕がますます勧められるようになる。そして，実はそれよりかなり前から起こったことですが，他の換金作物の栽培も盛んになってくる。これは富岡市立美術館の伊藤克枝氏にお教え頂いたものです。今より300年も前の本ですが，なんと気候の最も恵まれない津軽藩で作られた，養蚕の手ほどき書です。ある経済担当の藩士がまとめたものです。そしてこれを見るとおもしろいことに，もちろん，大黒様のネズミが偉い，猫が怖いとなるのですが，この中の文章には，養蚕，お蚕さんのいちばんの敵はネズミとあります。ネズミは蚕そのものを食ったり，繭を食ったりするのです。それで，養蚕業が盛んになった段階から，ネズミ退治に，「よき猫を飼うべし」ということになるわけです。ここあたりから，実生活でのネズミ株は下がってきます。

猫に小判（これも目出度い）

さて画像06です。これは妙ですね。『仮名読八犬傳』。なのに猫。これは幕末，徳川時代後期の浄瑠璃本とか読本の次に流行した合巻，続き物の小説です。柳亭種彦『偐紫田舎源氏』も続き物ですが，さて続きがどうなるか，どうなるかと，女性読者が版元に続きを早く出せ出せと騒ぎ立て，超ベストセラーになりました。この絵は「春水」と書いてあるけれども，二代目春水ではないかと思います。調べなくてはなりません。

『仮名読八犬傳』は，要するに馬琴の名作のダイジェスト版です。この画家名を見ると，なるほどと思います。一勇斎国芳という最も猫を好きだった画家で，世界の猫画家番付に載っている人です。そしてこれは何をやっているのかというと，庄屋，猟人，キツネで藤八拳。拳を遊んでいるのです。要するにじゃんけんのルーツですね。

そしてこの着物の模様を見てください。猫に小判。猫に鈴。「猫に小判」は，次の時代のキーワードのひとつとなります。猫のいるおかげで，猫の手を借りて，お蚕さんが豊作となって，金もうけができて，たくさん税金を納めることができて，生活に潤いが与えられて，めでたし，めでたしというわけです。ただ他方で，大黒様のネズミのほうも，それはそれで信奉されました。ネズミの地蔵さんもネズミの大黒様もいます。

そして明治へ

とにかく次へ飛んでいきましょう。画像09は，明治の世の中です。仮名垣魯文，ジャーナリズム，流行，風刺。ありとあらゆるものをおもしろおかしく書いて，政府を冷やかしています。ただ，ほどほどにしないと，相も変わらず手鎖になってしまうのは，春水と種彦の時代と同じです。

これは三代広重の絵で，仮名垣魯文の『魯文珍報』という雑誌の猫たちです。のんびり，かわいい猫たちです。これをいつぞや名刺の模様に使ったことがあります。本の上に座っている猫。エジプトで穀物をネズミから守る猫が神様となったという説がありますが，私はもうひとつの説が絶対にあると思います。パピルスの上に「お猫さま」が寝ている間は，書けないでしょう，神様だから。だからエジプトの書家もお酒（その時代はビールですね）を飲んだり，散歩に行ったり，寝そべったりして，時間をつぶしました。エジプトは戦争した場合にもうまくいって，あとはのんびりとやってたんです。5000年もったのは猫のおかげでしょう。これは私のふざけ半分の説ですけれども。エジプトの猫同様，この図の猫ものんびりした猫たちです。しかし，この絵からわかるように，のんびりした猫ばかりで

はないです。この絵にはネズミを捕る猫の姿がずばり出ています。本当にこの作者はよく見ています。明治時代だって，やはり，いやますます，蚕は大事でした。今度は換金作物としてだけでなく，外貨稼ぎの絹を増産する意味で。それでますます猫の手を借りなければならないということになります。

今日のレジュメの付録編にドイツ語圏，英語圏の猫の歌をいろいろ書いていますが，残念ですが，それについてお話する時間はないようです。18世紀以後は，猫文学が栄え，ネズミ文学はそれなりにでした。中世ドイツ，ちょうどバロックの角を曲がったところの最も有名な作品のひとつは，やはり伝ホメロスの『鼠と蛙の合戦』の焼き直しです。ローレンハーゲンという人が書いているけれども，ずばり，それはネズミ話です。

幕末そして明治になると，絹が海外に売れるというのがわかって，明治５年には富岡製糸場も創立され，今度は国ぐるみで繊維，絹関係の仕事をもっと積極的にやりましょう，大量に生産しましょうということになります。明治以降はそれまであまり養蚕が盛んでなかった地方，それほど大量にやっていなかった地方でも養蚕が重視されるようになりました。幕末から明治30年ごろにかけては，養蚕業のハウツー書が出るわ，出るわ。

だから，いきなりでもないけれども，善玉としての猫，悪玉のネズミがますますはっきりしたかたちで浮き彫りにされてくるようになりました。

善玉猫のひのき舞台

画像11はご存じ，赤穂浪士討ち入りのものです。あと２週間でその日がくるでしょうか。そういえば，妙なものですね。真珠湾の記念日は３日後です。私は赤ん坊でした。いつまでも平和な世の中であってほしいけれども。生まれたとき，まさか，しばらくしたら日本の地に立って日本のことを論じたり，皆さんに退屈させているときがくるとは夢にも思いませんでした。

これは『忠臣蔵』だけれども，猫が赤穂浪士です。下から始まって上に

行きます。途中でかわいいネズミの奥女中たちが逃げて行く。上のほう，親父，吉良が引きずられて，これでだいたいめでたし，めでたし。猫とネズミ，敵同士を，今でいうと絵本の１枚にまとめたものです。これはこれなりに読むべきものであって，ちょっと見て,「きれいだね」「かわいいね」でおしまいというものではないです。

次の図は明治10年代のものなのですが，やはり，明らかに猫が善玉です。ネズミもかわいいもので大黒様のお使いだけれども，今度は猫が中心。そしてもうひとつ，この画像12は本当にスーパーふざけの同じ画家によるものです。ネズミ地獄。そこでは怖い猫の閻魔大王がネズミを裁判にかけています。そして中国式宮廷風俗のお役人が並んでいます。こちらが責めの場面。

釜ゆでに，火の車，そして舌を抜かれて恐ろしい。責めるのは全部猫。苦しむのは生きている間に悪徳を働いたネズミたち。ちょっと哀れなのは子ネズミのうちに亡くなった，それほど罪がないものたち。人間の子どもなら，賽の河原ですね。

これ，見てください。賽の河原に着いたら，どうするのですか。奪衣婆という，伝説でつくられた人物。仏教にそういう人はいないのですけれども,「奪衣婆」と書いて読むから，日本で勝手にそういう伝説的人物をつくってしまったのです。

奪衣婆がここで子ネズミたちの着物をもらっているのです。奪衣婆を祭るお寺さんが東京に何か所かあります。例えば四谷のちょっと北のほうに。そしてじいさん，ばあさん，姉さんということで，幕末に流行の神様となって，拳遊びにもなったのです。じいさんは翁稲荷，ばあさんが四谷の奪衣婆，そして姉さんはお竹大日如来です。お竹大日如来は，まさに商売繁盛の手伝いをした聖のような女中で江戸中期に実在した人物です。

ここでおもしろいのは, やはりお地蔵さんの絵が描かれていない点です。子ネズミたちの辛さを少しは和らげたり，なぐさめたりするのは，どこの仏様でしょう。日本における仏教的伝説では，お地蔵さんでしょうが，こ

れはお決まりの大黒様，ネズミだから。だから一貫しています。

「猫の手」と「女の手」で養蚕業も繁盛

養蚕の手ほどき書が数多くでました。これは群馬県立博物館にある明治の写本です。この元本はさらに約100年前の18世紀末期の本です。こういうものは，地方の古本屋に行けばごろごろしているでしょう。

ゴロゴロと言えば，猫。ここにいっぱい猫が描かれています。猫を飼うべきということで。近くだと，すぐに戻ってしまうから，子育てのうまいお母さん猫の子猫をちょっと離れたところからもらって，そして足においしい油をつけたりして，逃げないようにして，ネズミの番人をしていただくということです。

次は３枚続きです。ご～ざった，ご～ざった，大黒さまがご～ざった，お猫様がご～ざった。以前からのなごりからいうと，ネズミよけの猫の姿を描いたハウツー書が山ほどあります。錦絵のシリーズで。ちょっと裕福なお嬢ちゃんたちに養蚕を教えるための錦絵のシリーズに，必ずといっていいぐらい猫が出るのです。明治になってから，信州ではなかったかと思いますが，出世した工女や製糸場の工場主が，新年のお祝いにすごろくを作って，袋つきでみんなに配ったのです。あまり残っていませんが。お蚕さんを養っている場面で，そこにも猫が当たり前のようにいます。

そして，養蚕室に実際に，怖い顔をしている猫の絵を飾って，ネズミを脅すという習慣があったのです。とくにそのへんで有名なのは，今でいうと上毛かな，新田藩の殿様で，変な猫を描いて（画像 08），農民にあげて，とくに蚕さんをたくさん養った農民にごほうびとして与えたりしたのです。画像15は群馬県下新田八幡山遍照院というお寺さんで作られた同系統のものです。

その猫の絵の流れがどこまで続いたかわかりませんが，少なくとも満州事変の寸前まで続いたと思われます。結局，女の手を借りる，農家の娘が製糸場に奉公に行って，おっかさんや姉さんとか，ちょっといいところの

女中がみんなでお蚕を養って，それでやはり猫の手も借りたりしたわけです。

怖い猫はあとでもう一度登場します。私もそれを見るとおっかなくなる。それが明治18年，19年。つまり，養蚕業が一般にいちばん話題をよんでいるときに流行したのです。お殿様が絵を描いて農民に配ったとき，本当は養蚕室に飾ってもらって，ますますたくさんの繭を取ってほしかったけれども，農民はめっそうもないということで奥座敷にかけておきました。群馬に行って，ちょっと古道具屋を歩けば，けっこう出てきます。このごろ高くなって，以前ほど盛んに出ないのですが。

新田さん，三代のお殿様も，代が進むにつれて，ますますぎこちない猫を描き，そのへんの有名な和尚さんも，猫の絵を描いて配ったり，猫の札を木版にして配ったりして。猫のほかに，今日は話はご法度ですが，クチナワということで，結局，ネズミも。ネズミはヘビのえさにもなります。ですからヘビは怖いけれども，やはりクチナワ大明神ということで，養蚕がうまくいくことを祈ったのです。

ところで画像10の絵で，紫色の雲に乗っている女性に皆さん気づいたでしょうか。「ネズミよけ」と書いてあります。その格好はなんの格好でしょうか。万葉風俗じゃないかな。女神のオキヌさま。この絵の作者はしかるべき画家です。楊州周延という浮世絵の晩年の人で，今度，国際基督教大学の湯浅八郎記念館で，大きな展覧会が行われることになっています。この人は新潟の高田藩の武士で，絵の修行のために江戸にやられていました。たぶん，自分の幼いときの体験から，どんなに養蚕がたいへんなことかわかったのでしょう。でも，これは非常におもしろい絵です。ちょっとおっかない顔をしている猫ですが，この猫の絵のたぐいは今となってはあまり残されてないです。

お殿様の絵なら別ですが，普通の猫の絵は養蚕小屋に飾られて汚くなって落ちては，次に大阪か東京，富山の薬屋が回ってきては，また新しいのをくれるわけです。それはそれぞれの藩ごとに商売になったし，薬屋にと

っても商売になった。結局，一般の農民，町の住人だけではなく農民も，どれだけ猫の手を借りたかったかという証拠でもあります。猫の絵が残っていないから少なかったのではないかというのは逆です。100年前のこの日付の新聞はいくつ残っているでしょう。数多く出れば出るほど消えてしまうというものです。

これは遊びの中の猫とネズミの戦争です。「十六武蔵」，ぴんときますか。ぴんとこない人，手を挙げて。十六武蔵，親玉１つ，子玉16つで，英語圏やドイツ語圏のキツネとガチョウの遊びに似てます。要するに間に入って勝負を争います。最後まで残るのが親玉ならば親玉の勝ち。これがちょっと汚い言葉ですが，雪隠と言われています。雪隠詰め，子玉が親玉を雪隠詰めできれば，子玉の勝ちです。

そしてこれは猫が親玉。いろいろなネズミが子玉。これはネズミですけれども，お芝居の白浪物の番付入りの鼠小僧次郎吉です。実在した人物で死刑にされてしまったそうですが，お芝居に，白浪物がはやったときに取り入れられて。だから，泥棒ネズミがお餅を盗んでいるという姿で描かれています。そしてネズミ捕りのカゴを平気のへっちゃらで逃れているわけです。

画像16は，養蚕農家の奥さん，お嬢さん，姉さん，女中たちの絵です，みなさん，こんなきれいなオベベを着て仕事をしたのでしょうか。これは理想像です。でも，画家はさっきの怖い猫と同じ楊州周延です。国が栄えるのは，お蚕さんと努力家の農家の女性たちと，そしてあとはだれでしょう？タマちゃんです。ここで桑の葉っぱを与えるはしごの上に乗って見張りをして，「あ，タマちゃん，いい子，いい子」とでも言っているのではないでしょうか。でも，友禅染の着物，そしてこの前掛けだって優雅でいいですね。たぶん，これは実態とはかなり違うでしょう。しかし，明治の中期から末期にかけてのひとつの社会の理想像と商売繁盛の願いの両方を描いている絵ではないでしょうか。

猫とネズミの『先代萩』：大黒様のお蔭で和解？

先ほどお話ししました『伽羅先代萩』画像13は，この話題にちなんで明治のお芝居からもうひとつ。画家は別の資料で歌川国利だとわかっています。上から下にという順番でいきます。ネズミがうじゃうじゃ，視覚資料ですけれども。

今日は聴覚資料もひとつ，もってきたかったのです。地唄で「荒れ鼠」というものです。夜中の台所の有り様を描いて，親分ネズミが子分を連れてうじゃうじゃ出てきて，そして柱を走って，三味線がダーダラダララ。いつかぜひ，折があったら聞いてください。ネズミが荒れて暴れる，そして最後に「ニャ～ゴ」という声が聞こえて，みんな逃げてしまうのです。この上が，まさにそういう場面です。

一家の主が，これももうひとつのお芝居，「鳥羽絵」。皆さん，踊りのおさらい会で見たことがあるでしょう。清元だったと思うのですけれども。丁稚小僧がマスでネズミをおさえようとして，なかなかうまくいかない。ここで枕でぶとうと思っているのです。そのネズミが，先ほど言ったように，『伽羅先代萩』の仁木弾正，行灯からバケネズミ。ネズミ一色の裃をつけて出てくる。

そして先代萩の政岡の味方をする忠実な御殿女中で，ぼんぼりをさして出てくるが，ここのおかみさんもそういう格好。そして子どもがおもしろくなって，がたがたがたと拍子木を打って，ネズミ浄瑠璃の太夫三味線がここにいて，その他は見物席。それがこの夜中の台所風景。そして下のほうにネズミ一族を追っ払おうとする図。中段は昼間の図で，みんなオベベを着て，ここがおもしろい。

「女猫」と書いてあって，これ，柳帯，はっきりいって芸者さんですけど。見立て，猫。三味線を振り回してネズミをバンとしようとして。ちょうど安政の大地震のときのナマズ絵みたいに，商人は算盤，家庭の主婦が台所道具，子どもが筆箱，芸者さんは決まって三味線です。ネズミは「堪

忍」「堪忍」と言うけれども，「出て行け」「出て行け」と。

そしてどうなるか。大黒様が入ってきて，「まあまあ」と言って，お決まり。単純な粗筋ですけれども，「ネズミはわしが預かるから，台所に入らないように，蔵に入らないようにすればいていいでしょう」と，そこで和解するのです。

ここに猫，芸者さんの格好をした猫が蔵の前に立って，「でも，ここはだめですよ」と。そしてネズミが「承知しました」と言って，マスがあって「益々繁盛」で，金貨がいっぱい入って。そしてこれはなんの木でしょうか。金の成る木です，文字どおり。そういう「金の成る木」の鉢がほしいですね。ネズミの親方と人間の責任者がお辞儀をして，めでたし，めでたし。これは明治中期のものです。

画像14も同じころのものと考えられますが，要するに養蚕の各段階。種から始めて，最後は糸をつむいで機を織ります。やはり日本にとって，このとき，生糸や綿，織物の輸出が国の礎のひとつでした。ここに登場する人物，じゃなくて猫物は，みんな猫です（笑）。ここでは，要するに猫の見立てで絹づくりの各段階が，わりに細かく描かれています。

モダン好みの猫，ネズミ。これはおまけです。一般に知られていない大阪の画家です。竹久夢二のおまけ（画像17）も皆さんの資料に入っているのですけれども。ネズミどうし。「ちょっとごめんよ」と，かわいいネズミの姿をひとつ出したかったのです。明治の末期のロバート・ブラウニングの『ハーメルンの笛吹き』にもとづいたと思われる石版の絵本，ご覧にいれたかったけれども，コピーを取った三つ折りが隠れてしまって出てこない。これ，たぶん，ドイツのある絵本をだいたい丸写した竹久夢二の紳士淑女のネズミさんのかたちです。

これは絵がすごいです。（画像01）おもしろいです。ネズミがいて，このネズミが台所から逃げて蔵を目指そうとしています。その途中で，お風呂場があったり，座敷があったり，庭があったり，とにかく一生懸命逃げていきます。細かく，どこにネズミが行けるか，行けないか，書いてありま

す。でも，行くのがそう簡単ではないです。なぜなら，途中でタマちゃん，ポチちゃん，タロウちゃん，ハナコちゃん，そして抜け目のない女中のお鍋さんが構えているのです（笑）。この顔を見てください。

結局，猫・ネズミのトポスというのは，こういう形になって，大正，昭和初期まで続いています。今日，見つからないからご覧に入れなかったのですが，小林清親，その他，明治の風刺画の名人たちは，日露，日清戦争，日本の軍艦は善玉で猫になぞらえている。そしてあちらの敵のほうはネズミ。袋のネズミにしているという絵もあります。すごくおもしろいです。

残りあとわずかです。これを見ましょう。これは本当はお寺さんの僧侶が描いたものです。虎の巻がないと読めないです。なんとかの寄進，かんとかの寄進。そしておっかない顔をしてにらんでいる猫たち。これもシッポが長くて，一部，縞の猫，これ，なんていうのか。ちょっと一部分は白，一部分は虎模様となって，今でもあるのですけれども。

画像15はお蚕さんの護り。猫が番をしているところで，この絵はやはり養蚕室に行くはずだったけれども，ありがたいから奥座敷で拝まれたのです。関東大震災は大正12年で，これは10年だから，震災前のものですが，実用石版画だから他には残っていないようです。これはいうまでもなく，養蚕室に飾るネズミよけ猫です。

そしてこの出版元は，幕末のころから戦後まで出版を続けた，綱島亀吉。綱島という苗字を明治になってから名乗ったのですが，彼が出した戦後版の絵本とか，暦とか，わりと大衆向けの出版物が探せば出てきます。

この絵のこの色を人々がよく浮世絵の色だと言いますが，そうではありません。これは明治のニス，油性絵の具を使った，わりとどぎつい色です。でも当時としては，とくに地方の農家にとってはたいへんナウイ色だったと思われます。この絵は結びとしてちょうどいいでしょう。貫禄たっぷりの猫が，きれいな赤い縮緬の首輪をしてネズミを押さえています。このネズミの表情も痛烈ですね。その周りにあるのは何でしょう。「猫に小判」のもうひとつの解釈があります。つまり猫にとって役に立たないものという

意味ももちろんありますけれども，猫がいたおかげでネズミからお蚕さん――この時代はとくにお蚕さんですね――もしくはお米，その他の品物が守られたおかげで商売繁盛，ぼろもうけ，めでたし，めでたし。

永遠のトポス：猫・ネズミ

以上，猫・ネズミについて，経済史において，社会において，一般文化の流れにおいて話してみました。おもしろくてためになる話ができた自信がないのですが，私たちにとって当たり前の現象は，ちょっと観点を変えてもう一度見つめれば，当たり前だとは限らないことがわかります。新発見はいくらでもできます。ネズミと大黒様に守られて，猫に番をしていただいたおかげで商売繁盛，めでたし，めでたし，というお話でした。どうもありがとうございました。（拍手）

質問

絵　所　おもしろいですね。何か，図像学のような話ですね。おそらくそういう手法をとられているのですね。

ヘリング　私はあまり難しいことができる人間ではないので，絵を中心にして，文章を中心にして，あるいはどういう本がいつ出たかということを中心にして考えようとしています。ルイス・キャロルの猫・ネズミの関係やら，マシュー・アーノルドだの，ゲーテだってあります。きりがないです。ゴットフリート・ケラーの『ネコのシュピーゲル』だの，シェッフェルの『ラッパ吹き物語』に出てくる哲学者猫ヒッデガイガイの歌。ドイツ文学者の間で，今はあまり人気がないのですが，ヒッデガイガイはすごい猫です。E.T.A.ホフマンの『牡猫ムル』も有名。

そして言うまでもなく，そうそう，日本で言いだしたらきりがない。結局，日本独特とか，どこそこ独特って，どうでもいい。ネズミはどこだって邪魔。猫はどこだって，ちょっと怖い，それなりにかわいいという性質があって。だから猫の小説も，ネズミの小説もちゃんとある，歌もある。

与謝野晶子のとっても楽しいネズミの歌があるけれどもやめました。石井桃子先生にも，猫の物語『山のトムさん』があって，決して夏目漱石ばかりではないのです。法政ゆかりの内田百閒，そして資料が法政や大原社研（大原社会問題研究所）にしかないものが数多くある堺利彦。これも明治・大正の話ですけれども，堺利彦は，晩年は動物愛護運動の先頭に立ったのですが，『我家の犬猫』という本も書いたのです。市民生活において，とくに日本の民俗学的に猫・ネズミがどのようだったかを知りたかったら，その本をお薦めします。本学の現法研（現代法研究所）にあります。二葉亭四迷だって，猫の歌を詠んだことがあると聞いたことがあるし，もうどこまでいくやら。

猫・ネズミは商売繁盛の手伝いをこれからもするかもしれない。漫画だの，本だの，研究書だって，売り物でしょう。だから猫とネズミという名コンビがこれからも歴史を歩み続けるでしょう。

廣　川　ヘリング先生，招き猫もおなじような過程で出てきたのでしょうか。

ヘリング　あの絵をご覧にいれましょう。富岡市立美術博物館の展覧会図録は，神保町で，今，6,000円，7,000円で売っているみたいです。

廣　川　7,000円も。すごいですね。これ，猫の背中も出ている。おもしろいなと思って。

ヘリング　これは2年前の図録の表紙です。富岡市立美術博物館の皆さんと地元の印刷屋，いい仕事しましたね。表紙と裏表紙が招き猫の裏表。これを見てください。松竹梅。小判，そして，ご～ざった，ご～ざった，大黒様がご～ざった。だからネズミ・大黒だけでなく，猫と大黒というコンビもあるのですよ，おもしろいことに。

そしてこの格好どうです，見て。この耳と手を省いたら，ダルマ。そう思いませんか。奥多摩とか，聖蹟桜ヶ丘でも，深大寺でも，そして青梅線の北のほうに入ってもこの手のダルマがあります。

ハベル　川越にも。

ヘリング　川越も。要するに，養蚕農家のあったところ，あるいは繭を集める問屋がいたところで，ダルマがはやっていた。そしてダルマの格好にちょっとバリエーションをつけて，招き猫もできました。招き猫をしゃべったら，来週までここに立っているでしょう。（笑）

招き猫の由来は，そういうものが好きな民俗学者がいろいろ論じますが，ひとつ言えるのは，南楠社という大阪の住吉大社の末社にあります，招き猫。こっちこそ，招き猫の総本山だというのです。といっても，世田谷の井伊さんのお寺，豪徳寺も招き猫の由来があるということです。どれを見ても，商売か養蚕，あるいは両方のところです。張子屋さんはダルマを使って猫もつくれる。そしてそれを売ってみたら，それが当たった。またまた商売繁盛。

だからこのようにして，単純なものにこそ，裏の意味が，ちょっと違った意味があります。そして先ほどの絵に，浅草の今戸焼きという素焼きの人形，縁起物をつくる白井さんという方がいます。普通はあちこちの稲荷明神のキツネをひとつがいずつ作っていますが，玉姫稲荷のウサギ，婦人病にとくに効くといわれているそこのウサギ人形も作っています。再来年に売れそうですね。そしてとても生き生きした，国芳の絵の丸写しと思われる招き猫もあります。だから，やはり商売になるのですね，ありがたいですね。

私にとって，いつかこれ，全部，どうにか本に。あるいは何冊かまとめて，それが動いて，出版社にとっても「商売」になる日がくればいいなということです。いいご質問をありがとう。

堺利彦氏の動物愛護運動は，案外，知られていないみたいです。満州事変の後，戦争という大きなブラックホールが続くのです。それまで非常に進歩的だった世の中のこと，つまり大正のモダニズムが忘れられてしまいました。今になって，大発見というのは，冗談ではないです。そのときに少女時代で，姉さんあるいはお母さんに手を引かれて，松屋とか三越とか高島屋に買い物に行って，その雰囲気をたっぷり吸い込んだという思い出

のある方が，しょっちゅう仕事，研究で図書館にきています。その当時は当たり前と思ったことがらも，一世代，二世代たつと，当たり前でなくなります。おもしろいですね。

そしてとくに満州事変という変なことがあって，真珠湾という変なことがあって，米軍による支配というそれなりに変なことがあって，いろいろ害のないこと，明るいこと，おもしろいことがその暗闇の中にかくれんぼしてしまいました。私たちみんなそれぞれの立場から再発見し，みんなにこういう人類の歴史，日本の歴史があったのだと，また教えて元気づけてあげればいいと思います。

でも，堺利彦とのかかわりに，ちょっとでもよいからここで触れておきたい。『我家の犬猫』は，昨日，大原社研の若杉さんに調べていただきましたが，国会図書館にもないのだそうです。法政に，いつの日か「ヘリング文庫」をつくる気はないでしょうか。（笑）

宮　崎　『我家の犬猫』というのは，いつの出版なのですか。『平民新聞』を出す前ですか。

ヘリング　ほぼ同じ頃だと思います。『我家の犬猫』の出版は1903年です。

宮　崎　大逆事件の後ですか。

ヘリング　事件より前になります。大原社研には，堺利彦が立候補した時に「投票できるならもちろん私も一票を投じます」という，与謝野晶子の書いた色紙が残されています。このことを学生たちに，なぜかわかりますかと聞いても，ピンとこない。参政権はいつ女性に渡ったのかと私が言って初めて，彼らはやっと，ああ，そうかと思うわけです。だからもっと徹底した日本史を，明るい立場から教えてほしいけれども。堺利彦の犬猫関係の本は他にもあります。ただ，『我家の犬猫』は堺利彦全集書誌目録にいちおう入っています。そういえば，同時期ユーラシア大陸の向こうでローザ・ルクセンブルクも愛猫家でミミさんという猫を飼っていたんです。それは案外知られていないみたいです。

絵　所　大変に面白いお話でした。ありがとうございました。